

## メキシコの「麻薬戦争」を読む（ライブラリ・コーナー）

著者	村井 友子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	252
ページ	49-49
発行年	2016-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00039498">http://doi.org/10.20561/00039498</a>

## メキシコの「麻薬戦争」を読む

村井友子

近年、メキシコでは、麻薬の密造・密売組織「麻薬カルテル」同士の抗争、麻薬カルテルと軍・連邦警察間や地域住民が組織した自警団との武力衝突などを原因とする犠牲者が年間約一万人に上るといふ深刻な事態が続いている。

ヨアン・グリロ『メキシコ麻薬戦争：アメリカ大陸を引き裂く「犯罪者」たちの叛乱』（現代企画室、二〇一四年）は、イギリス人ジャーナリストが、メキシコ社会に深く根を下ろした麻薬問題について一〇年に渡る取材をもとに纏めた渾身のルポ作品である。

パートI「歴史」では、二〇世紀初頭にシナロア州の山岳地の農民だった麻薬密輸入「ナルコ」のルーツから、今日のパラミタリー組織となるまでの、一世紀に及ぶ急激な変容を追い、パートII「内臓」では、麻薬密輸、マネーロンダリング、殺し屋の仕事、マフィアの文化や信仰など麻薬カルテルの内実を肉薄する。パートIII「運命」では、メキシコの麻薬問題をグローバルな視点で論じ、今後の行方を展望している。

メキシコで麻薬を巡る武力抗争が北部国境地域を中心に拡大し「暴力の拡散」が起きたのは、フェリペ・カルデロン政権期（二〇〇六～二二

年）であった。同大統領は、二〇〇六年一二月の着任と同時に麻薬カルテルと戦う軍と連邦警察の人員を大幅に増強し、強硬な麻薬規制政策を実行した。福海によれば、その結果メキシコの「麻薬戦争」は、カルデロンの麻薬撲滅戦争とカルテル同士の縄張り争いと二種類の戦争が時には平行して、時には絡み合いながら存在することになった。福海さやか「コカイン産業・麻薬密輸組織の影響力」（『国際安全保障』第四〇巻、第三号、二〇一二年二月）。

現在、メキシコの政権は、カルデロン政権からペニャ・ニエト政権（二〇一二年～）に代わっている。メキシコの週刊誌 *Proceso*, 8 February 2015 によると、カルデロン政権下の失踪者が一日平均六人だったのに対し、ペニャ・ニエト政権下では平均一三人に倍増し、事態はより深刻化している。

一方、野内によると、メキシコの麻薬問題は、「暴力の拡散」だけが問題なのではない。その根源には、メキシコ社会全体に蔓延している汚職問題があり、公権力のなかに属すものが、非合法勢力のために情報を流す、または便宜を図るといふ状況または非合法勢力に対峙するために投入された軍が人権問題で告発され

るといふ状況がある。野内遊「チャポ・グスマンの台頭と社会的諸要因：メキシコにおける麻薬問題に関する一考察」（『国際開発研究フォーラム』四二号、二〇一二年三月）。

元シナロア・カルテルの最高幹部で、米州最大の麻薬ボスといわれたエル・チャポことホアキン・グスマンが、今年一月、メキシコ海軍特殊部隊に再逮捕された。グスマンはシナロア州の貧農の子として生まれたが、麻薬取引によってフォーブスの長者番付に名を連ねるほどの高額所得者となり、メキシコ治安当局に逮捕されるも二度（二〇〇一年、二〇一五年）脱獄に成功し、逃亡中の身であった。この行動の背景に麻薬カルテルへの公権力の浸透と癒着問題があることは、いまでもない（*Proceso*, 31 January 2016）。

最後に、メキシコの麻薬カルテルが南北アメリカの麻薬取引でいかに勢力を拡大してきたのか概観したい。二村によると、第二次世界大戦後キューバ・マフィアがアメリカ市場へのコカイン密輸を牛耳っていたが、キューバ革命（一九五九年）後、衰退した。その後、一九七〇年代半ばに、コロンビアの麻薬組織が、アメリカのコカイン市場の主導権を握り、なかでもパブロ・エスコバル率いるメデジン・カルテルが勢力を拡大し、一九八〇年には対米密輸の約八割を占有していた。

メキシコの麻薬カルテルのコカイン

取引は、一九八四年にシナロア州ハリスコ州に影響力を持つメキシコ麻薬組織のボス、フェリクス・ガジヤルドが、メデジン・カルテルとコカイン密輸で提携したことを契機とした。メキシコは、コロンビアから密輸されるコカインの七〇％が通過する中継地であったと同時に、アメリカ市場で消費されるマリファナの最大の供給地、ヘロインや化学合成麻薬アンフェタミン類の一大生産国でもあった。コロンビア・マフィアの勢力衰退にともない、メキシコの麻薬組織は次第に影響力を強め、一九九〇年代末にメキシコは南北麻薬ルートの最大の支配者となった。二村久則「南北アメリカのドラッグ・ネットワーク」（二村久則・山田敬信・浅香幸枝編著『地球時代の南北アメリカと日本』ミネルヴァ書房、二〇〇六年、第六章）。

アメリカ麻薬取締局（DEA）によると、北アメリカに密輸されるコカインの約九〇％がコロンビア産で、メキシコ経由または中米諸国を中継してメキシコからアメリカ・カナダに持ち込まれている。二〇一四年に北米に密輸されたコカインの約八七％がメキシコ―中米回廊経由で持ち込まれたもので、この取引を支配しているのがメキシコの麻薬組織である（UNDOC, *World Drug Report*, 2016）。

（むらゝ）ともこ／アジア経済研究所 図書館